唄立山心中一曲

泉鏡花

一

「ちらちらちらちら雪の降る中へ、松明（たいまつ）がぱっと燃えながら二本——誰も言うことでございますが、他（ほか）にいたし方もありませんや。真白（まっしろ）な手が二つ、悚然（ぞっ）とするほどな婦（おんな）が二人……もうやがてそこら一面に薄（うっす）り白くなった上を、静（しず）かに通って行（ゆ）くのでございます。正体は知れていても、何しろそれに、所が山奥でございましょう。どうもね、余り美しくって物凄（ものすご）うございました。」

と鋳掛屋（いかけや）が私たちに話した。

いきなり鋳掛屋が話したでは、ちと唐突（だしぬけ）に過ぎる。知己（ちかづき）になってこの話を聞いた場所と、そのいきさつをちょっと申陳（もうしの）べる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢（ながじゅばん）で顕（あらわ）れたようなお話で、少くとも御覧の方はさきをお急ぎ下さるであろうと思う、で、簡単にその次第を申上げる。

所は信州姨捨（おばすて）の薄暗い饂飩屋（うどんや）の二階であった。——饂飩屋さえ、のっけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思うべしで。……その癖、可笑（おかし）いのは、私たちは月を見ると言って出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるような筋ではないから、本名で

言っても差支えはなかろう。その時の連(つれ)は小村雪岱(こむらせったい)さんで、双方あちらこちらの都合上、日取が思う壺(つぼ)にはならないで、十一月の上旬、閏年(うるうどし)の順におくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であった。

——居待月である。

一杯飲んでいる内には、木賊(とくさ)刈るという歌のまま、研(みが)かれ出(い)づる秋の夜(よ)の月となるであろうと、その気で篠(しの)ノ井で汽車を乗替えた。が、日の短い頃であるから、五時そこそこというのにもうとっぷりと日が暮れて、間は稲荷山(いなりやま)ただ一丁場(ひとちょうば)だけれども、線路が上りで、進行が緩い処へ、乗客が急に少く、二人三人と数えるば

かり、大(おおき)な木の葉がぱらりと落ちたようであるから、掻合(かきあ)わす外套(がいとう)の袖(そで)も、妙にばさばさと音がする。外は霜であろう。山の深さも身に沁(し)みる。夜(よ)さえそぞろに更け行くように思われた。

「来ましたよ。」

「二人きりですね。」

と私は言った。

名にし負う月の名所である。ここの停車場(ステエション)を、月の劇場の木戸口ぐらいな心得違いをしていた私たちは、幟(のぼり)や万燈(まんどう)には及ばずとも、屋号をかいた弓張提灯(ゆみはりぢょうちん)で、へい、茗荷屋(みょうがや)でございます、旅店の案内者ぐらいは出

ていようと思ったの大きな見当違（ちがい）。絵に描（か）いた木曾の桟橋（かけはし）を想わせる、断崖（がけ）の丸木橋のようなプラットフォームへ、しかも下りたのはただ二人で、改札口へ渡るべき橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升壜（びん）を下げて、月はなけれど敷板の霜に寒い影を映しながら、あちらへ行（ゆ）き、こちらへ戻り、で、小村さんが唇をちょっと曲げて、

「汽車が出ないと向うへは渡られませんよ。」

「成程。線路を突切（つっき）って行く仕掛けなんです。」

やがてむらむらと立昇る白い煙が、妙に透通って、

颯（さっ）と屋根へ掛（かか）る中を、汽車は音もしないように静（しずか）に動き出す、と漆（うるし）のごとき真暗（まっくら）な谷底へ、轟（ごう）と谺（こだま）する……

「行っていらっしゃいまし……お静（しずか）に――」

と私はつい、目の前（さき）をすれすれに行く、冷たそうに曇った汽車の窓の灯（あかり）に挨拶（あいさつ）した。ここへ二人きり置いて行かれるのが、山へ棄（す）てられるような気がして心細かったからである。

　壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡（なか）なる線路を渡った。

「ちょっと、伺いますが。」

「はあ？」
手ランプを提げた、真黒（まっくろ）な扮装（いでたち）の、年の少（わか）い改札掛（がかり）わずかに一人（いちにん）。
　待合所の腰掛の隅には、頭から毛布（けっと）を被（かぶ）ったのが、それもただ一人居る。……これが伊勢だと、あすこを狙（ねら）って吹矢を一本――と何も不平を言うのではない、旅の秋を覚えたので。――小村さんは一旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖か巌（いわ）を滴る、ひたひたと清水の音に、用心のため引返して、駅員に訊いたのであった。
「その辺に旅籠屋（はたごや）はありましょうか。」
「はあ、別に旅籠屋と言って、何ですな、これから下

へ十四五町、……約半道(はんみち)ばかり行(ゆ)きますと、湯の立つ家があるですよ。外(ほか)は大概一週間に一度ぐらいなものですでなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「さよう。」

「難有(ありがと)う――少しどうも驚きました。とにかく、そこいらまで歩いてみましょう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立って、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と来たんでは、一口飲ませる処とも聞きにくうございますよ。しかし何かしらありましょう……何(なん)しろ暗い。」

と構内の柵について……灯(ともしび)の百合(ゆり)が咲く、大(おおき)な峰、広い谷に、はらはらとある灯(ひ)をたよりに、ものの十間(けん)とは進まないで、口を開けて足を噛(か)む狼(おおかみ)のような巌(いわ)の径(こみち)に行悩んだ。

「どうです、いっそここへ蹲(しゃが)んで、壜詰(びんづめ)の口を開けようじゃありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山、田毎(たごと)の月ともあろうものが、こんな路(みち)で澄ましているって法はありません。きっと方角を取違えたんでしょう。お待ちなさいまし、逆に停車場(ステエション)の裏の

方へ戻ってみましょう。いくらか燈(あかり)が見えるようです。」

双方黒い外套が、こんがらかって引返すと、停車場(ステエション)には早や駅員の影も見えぬ。毛布(けっと)かぶりの痩(や)せた達磨(だるま)の目ばかりが晃々(きらきら)と光って、今度はどうやら羅漢に見える。

と停車場(ステエション)の後(うしろ)は、突然(いきなり)荒寺の裏へ入った形で、芬(ぷん)と身に沁(し)みる木(こ)の葉の匂(におい)、鳥の羽で撫(な)でられるように、さらさらと――袖が鳴った。

落葉を透かして、山懐(やまふところ)の小高い処に、まだ戸を鎖(さ)さない灯(あかり)が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を拡げつつ探り当てて、
「きっと飲ませますよ、この戸の工合が気に入りました」
と勢よく、一足先に上ったが、程もあらせず、ざわざわざわと、落葉を鳴らして落来るばかりに引返して、
「退却……」
「え、安達ヶ原ですか。」
と聞く方が慌てている。
「いいえ爺さんですがね、一人土間で草鞋を造っていましてね。何だ、誰じゃいッて喚くんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに済みません。発起人がこの様子で。」

「飛んでもない。こういう時は花道を歌で引込(ひっこ)むんです、柄にはありませんがね。何でしたっけ、……

　　わが心なぐさめかねつ更科(さらしな)や

　　　姨捨山に照る月をみて

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可(い)いわけです。いよいよ路が分らなければ、停車場(ステエション)で、次の汽車を待って、松本まで参りましょう。時間がありますからそこは気丈夫です。」

しかるところ、暗がりに目が馴(な)れたのか、空は星の

上に星が重(かさな)って、底(そこひ)なく晴れている――どこの峰にも銀の覆輪(ふくりん)はかからぬが、自(おのず)から月の出の光が山の膚(はだ)を透(とお)すかして、巌(いわ)の欠(かけ)めも、路の石も、褐色(かばいろ)に薄く蒼味(あおみ)を潮(さ)して、はじめ志した方へ幽(かすか)ながら見えて来た。灯前(あかりさき)の木の葉は白く、陰なる朱葉(もみじ)の色も浸(にじ)む。

かくして辿(たど)りついた薄暗い饂飩屋であった。

何(なん)しろ薄暗い。……赤黒くどんより煤(すす)けた腰障子の、それも宵ながら朦朧(もうろう)と閉っていて、よろず荒もの、うどんあり、と記した大(おおき)な字が、鼾(いびき)をかいていそうに見えた。

この店の女房が、東京ものは清潔(きれい)ずきだからと、気

を利かして、正札のついた真新しい湯沸を達引いてくれた心意気に対しても、言われた義理ではないのだけれど。

「これは少々酷過ぎますね。」

「ここまで来れば、あと一辛抱で、もうちとどうにかしたのがありましょう。」

実は、この段、囁き合って、ちょうどそこが三岐の、一方は裏山へ上る山岨の落葉の径。一方は崖を下る石ころ坂の急なやつ。で、その下りる方へ半町ばかりまた足探り試みたのであるが、がけの陰になって、暗さは暗し、路は悪し、灯は遠し、思切って逆戻りにそ

の饂飩屋を音訪(おとず)れたのであった。

「御免なさい。」

と小村さんが優しい穏(おだやか)な声を掛けて、がたがたがたと入ったが、向うの対手(あいて)より土間の足許(あしもと)を俯向(うつむ)いて視(み)つつ、横にとぼとぼと歩行(ある)いた。

灯が一つ、ぼうと赤く、宙に浮いたきりで何も分らぬ。釣(つり)ランプだが、火屋(ほや)も笠も、煤(すす)と一所に油煙で黒くなって正体が分らないのであった。が凝視(みつ)める瞳で、やっと少しずつ、四辺(あたり)の黒白(あいろ)が分った時、私はフト思いがけない珍らしいものを視(み)た。

二

框(かまち)の柱、天秤棒(てんびんぼう)を立掛けて、鍋釜(なべかま)の鋳掛(いかけ)の荷が置いてある——亭主が担ぐか、場合に依ってはこうした徒(てあい)の小宿(こやど)でもするか、鋳掛屋の居るに不思議はない。が、珍らしいと思ったのは、薄汚れた鬱金木綿(うこんもめん)の袋に包んで、その荷に一挺(ちょう)、紛(まが)うべくもない、三味線を結(ゆわ)え添えた事である。

話に聞いた——谷を深く、麓(ふもと)を狭く、山の奥へ入った村里を廻る遍路のような渠等(かれら)には、小唄浄瑠璃(じょうるり)に心得のあるのが少くない。行(ゆ)く先々の庄屋のもの置(おき)、村

はずれの辻堂などを仮の住居(すまい)として、昼は村の註文を集めて仕事をする、傍ら夜は村里の人々に時々の流行唄(はやりうた)、浪花節(なにわぶし)などをも唄って聞かせる。聞く方では、祝儀のかわりに、なくても我慢の出来る、片手とれた鍋の鋳掛も誂(あつら)えるといった寸法。小児(こども)に飴菓子(あめがし)を売って一手(ひとて)踊ったり、唄ったり、と同じ格で、ものは違っても家業の愛想――盛場(さかりば)の吉原にさえ、茶屋小屋のおかっぱお莨盆(たばこぼん)に飴を売って、爺(じじ)やあっち、婆(ばば)やこっち、おんじゃらこっちりこ、ぱあぱあと、鳴物入で鮹(たこ)とおかめの小人形を踊らせた、おん爺(じい)があったとか。同じ格だが、中には凄(すご)いような巧(うま)いのがあるとい

う。

唄いながら、草や木の種子（たね）を諸国に撒（ま）く。……怪しい鳥のようなものだと、その三味線が、ひとりで鳴くように熟（じっ）と視（み）た。

「相談は整いました。」

「それは難有（ありがた）い。」

「さあ、二階へどうぞ……何（なん）しろ汚いんでございますよ。」

と、雨もりのような形が動くと、紺の上被（うわっぱり）を着た婦（おんな）になって、ガチリと釣ランプを捻（ひね）って離して、框（かまち）から直ぐの階子段（はしごだん）。

小村さんが小さな声で、

「何(なん)しろこの体(てい)なんですから。」

「結構ですとも、行暮れました旅の修行者になりましょうね。」

「では、そのおつもりで――さあ、上(あが)りましょう。」

と勢(いきおい)よく、下駄を踏違えるトタンに、

「あっ、」と言った。

きゃんきゃんきゃん、クイ、キュウと息を引いて、

きゃんきゃんきゃん、クイ、クウン、きゅうと鳴く。

見事に小狗(こいぬ)を踏(ふみ)つけた。小村さんは狼狽(うろた)えながら、穴を覗(のぞ)くように土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、御免なさいよ。」

で、遁(に)げないばかりに階子(はしご)を上(あが)ると、続いた私も、一所にぐらぐらと揺れるのに、両手を壇の端(はじ)にしっかり縋(すが)った。二階から女房が、

「お気をつけなさいましよ……お頭(つむ)をどうぞ……お危うございますよ、お頭を。」

「何(なあ)に。」

吻(ほっ)としながら、小村さんは気競(きお)ったように、

「踏着けられた狗から見りゃ、頭を打(ぶ)つけるなんぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹み深いのがこれだから、余程周章(あわ)

てたに違いない。

きゃんきゃんきゃん、クイッ、キュウ、きゃんきゃんきゃん、と断々に、声が細って泣止まない。

「身に沁みますね、何ですか、狐が鳴いてるように聞えます。」

木地の古びたのが黒檀に見える、卓子台にさしむかって、小村さんは襟を合せた。

件の油煙で真黒で、ぽっと灯の赤いランプの下に畏って、動くたびに、ぶるぶると畳の震う処は天変に対し、謹んで、日蝕を拝むがごとく、少なからず肝を冷しながら、

「旅はこれだから可(い)いんです。何も話の種です。……話の種と言えばね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、この辺には、あわれな、寂しい、物語がありそうな処ですね。あの、月宵鄙物語(つきのよいひなものがたり)というのがあります、御存じでしょうけれど。」

「いいえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣(あさぎぬ)まくり手したる坊さん、というのが、話をする趣向になっているんですがね。（更科山(さらしなやま)の月見んとて、かしこに罷(まか)登りける

に、大(おおい)なる巌(いわ)にかたかけて、肘折(ひじお)れ造りたる堂あり。観音を据え　奉(たてまつ)れり。鏡台とか云う外山(とやま)に向いて、）……と云うんですから、今の月見堂の事でしょう。……きっとこの崖の半腹にありましょうよ。……そこの高欄におしかかりながら、月を待つ間(ま)のお伽(とぎ)にとて、その坊さんが話すのですが、薗原山(そのはらやま)の木賊刈(とくさがり)、伏屋里(ふせやのさと)の箒木(ははきぎ)、更科山の老桂(ふるかつら)、千曲川(ちくまがわ)の細石(さざれいし)、姨捨山の姥石(うばのいし)なぞッて、標題(みだし)ばかりでも、妙にあわれに、もの寂しくなるのです。皆この辺の、山々谷々の事なんでしょう。何(なん)にしろ、

　　信濃なる千曲の川のさゞれ石も

君しふみなば玉とひろはん

と言う場所なんですもの。——やあ、明るくなった。」

と思わず言った。

釣ランプが、真新しい、明(あかる)いのに取換ったのである。

「お待遠様、……済みません。」

「どういたしまして、飛んだ御無理をお願い申して。」

女房は崩れた鬢(びん)の黒い中から、思いのほか白い顔で莞爾(にっこり)して、

「私どもでは難有(ありがた)いんでございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらっしゃって下さると可いんですけ

れども。」

その時、一列に蒲鉾形（かまぼこがた）に反（そ）った障子を左右に開けると、ランプの――小村さんが用心に蔓（つる）を圧（おさ）えた――灯が一煽（ひとあおり）、山気が颯（さっ）と座に沁みた。

「一昨晩の今頃は、二かさも三かさも大（おおき）い、真円（まんまる）いお月様が、あの正面へお出（いで）なさいましてございますよ。あれがね旦那、鏡台山（きょうだいざん）でございますがね、どうも暗うございまして。」

「音に聞いた。どれ、」

と立つと、ぐらぐらとなる……

「おっと。」

欄干につかまって、蝸牛（かたつむり）という身で、背を縮めながら首を伸ばし、

「漆で塗ったようだ、ぼっと霧のかかった処は研出（とぎだ）しだね。」

宵の明星が晃然（きらり）と蒼（あお）い。

「あの山裾（やますそ）が、左の方へ入江のように拡がって、ほんのり奥に灯（あかり）が見えるでございましょう。善光寺平（ぜんこうじだいら）でございましてね。灯のありますのは、善光寺の町なんでございますよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「ははあ。」

「真下の谷底に、ちらちらと灯が見えましょう、あそこが、八幡の町でございましてね、お月見の方は、あそこから、皆さんが支度をなすって、私どもの裏の山へお上りになりますんでございますがね。鏡台山と、ちょうどさし向いになっております——おお、冷えますこと、……唯今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、どうなすったんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは真顔で膝に手を置いて、

「いえ、その縁側に三人揃って立ったんでは、桟敷が

落ちそうで危険ですから。」
「まったく、これで猿楽があると、……天狗が揺り倒しそうな処です。可恐しいね。」
と二人は顔を見合せた。
が、註文通り、火鉢に湯沸が天上して来た、火も赫と――この火鉢と湯沸が、前に言った正札つきなる真新しいのである。酒も銚子だけを借りて、持参の一升罎の燗をするのに、女房は気障だという顔もせず、お客冥利に、義理にうどんを誂えれば、乱れてもすなおに銀杏返の鬢を振って、
「およしなさいまし、むだな事でございます。おした

じが悪くって、めしあがられやしませんから。……何ぞお香（こう）のものを差上げましょう。」

その心意気。

「難有（ありがた）い。」

と熱燗（あつかん）三杯、手酌でたてつけた顔を撫でて、

「おかみさん。」

杯をずいとさして、

「一つ申上げましょう、お知己（ちかづき）に……」

「私は一向に不調法ものでございまして。」

「まあ一盞（ひとつ）。」

「もう、全く。」

「でも、一盞（ひとつ）ぐらい、お酌をしましょう。」

と小村さんが銚子を持ったのに、左右に手を振って、辷（すべ）るように、しかも軋（きし）んで遁（に）げ下りる。

「何だい。」

「毒だとでも思いましたかね。してみると、お互の人相が思われます。おかみさん一人きりなんでしょうかしら。」

「泊りましょうか。」

「御串戯（ごじょうだん）を。」

クイッ、キュウ、クッ、クック――と……うら悲（かな）しげに、また聞える。

「弱りました。あの狗(いぬ)には。」

と小村さんはまた滅入(めい)った。

のしのしみしり、大皿を片手に、そこへ天井を抜きそうに、ぬいと顕(あらわ)れたのは、色の黒い、いが栗(ぐり)で、しるし半纏(ばんてん)の上へ汚れくさった棒縞(ぼうじま)の大広袖(おおどてら)を被(はお)った、から脛(すね)の毛だらけ、図体は大(おおき)いが、身の緊(しま)った、腰のしゃんとした、鼻の隆い、目の光る……年配は四十余(あまり)で、稼盛(かせぎざか)りの屈竟(くっきょう)な山賊面(さんぞくづら)……腰にぼッ込んだ山刀の無いばかり、あの皿は何(な)んだ、ヘッヘッ、生首二個(ふたつ)受取ろうか、と言いそうな、が、そぐわないのは、頤(あご)に短い山羊髯(やぎひげ)であった。

「御免なせえ……お香のものと、嬶々衆（かかしゅ）が気前を見せましたが、取っておきのこの奈良漬、こいつあ水ぽくてちと中（ちゅう）でがす。菜ッ葉が食えますよ。長蕪（ながかぶ）てッて、ここら一体の名物で、異（おつ）に食えまさ、めしあがれ。——ところで、嬶々衆のことづてですがな。せっかく御酒を一つと申されたものを、やけな御辞退で、何だかね、南蛮（なんばん）秘法の痲痺薬（しびれぐすり）……あの、それ、何とか伝三熊の膏薬（こうやく）とか言う三題噺（ばなし）を逆に行ったような工合で、旦那方のお酒に毒でもありそうな様子合（あい）が、申訳がございません。で、居候の私（わっし）に、代理として一杯、いんえただ一つだけ。おしるしに頂戴してくれるようにと

申すんで、や、も、御覧の通（とおり）、不躾（ぶしつけ）ながら罷（まかり）出ました。実はね、媽々衆、ああ見えて、浮気もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、こちらのお若い方のような、おツこちが欲しさに、酒どころか、杯を禁（た）っておりますんでね。はツはツはツ。」

階子（はしご）の下から、伸上った声がして、

「馬鹿な事を言わねえもんだ。」

と、むきになると、まるだしの田舎なまり。

「真鍮台（しんちゅうだい）め。」と言った。

「……真鍮台？……」

聞くと……真鍮台、またの名を銀流しの藤助（とうすけ）と言う、

金箔(きんぱく)つきの鋳掛屋で、これが三味線の持ぬしであった。面構(つらがまえ)でも知れる……このしたたかものが、やがて涙ぐんで……話したのである。

三

「私(わッし)はね、旦那。まだその時分、宿を取っちゃあいなかったんでございます、居酒屋、といった処で、豆腐も駄菓子も突(つッ)くるみに売っている、天井に釣(つる)した蕃椒(とうがらし)の方が、燈(ひ)よりは真赤(まっか)に目に立ってッた、皺(しな)びた店で、榾(ほだ)同然の鰊(にしん)に、山家片鄙(へんぴ)はお極(きま)りの石斑魚(いわな)の

煮浸、衣川で噛しばった武蔵坊弁慶の奥歯のようなやつをせせりながら、店前で、やた一きめていた処でございましてね。

ちょっと私の懐中合と、鋳掛屋風情のこの容体では、宿が取悪かったんでございますよ。というのが、焼山の下で、パッと一くべ、おへッつい様を燃したも同じで、山を越しちゃあ、別に騒動も聞えなかったんでございますが、五日ばかり前に、その温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、この方に柄相当のなんぞ焼けていて、二三軒残ったのは、いずれも玄関附だからちとたじろいだ次第なんでございますが。

ええ……温泉でございますか、名は体をあらわすとか言います、とんだ山中で、……狼温泉——」

「ああ、どこか、三峰山の近所ですか。」

と、かつて美術学校の学生時代に、そのお山へ抜参りをして、狼よりも旅費の不足で、したたか可恐い思いをした小村さんは、聞怯をして口を入れた……噛むがごとく杯を銜みながら、

「あすこじゃあ、お狗様と言わないと山番に叱られますよ。」

藤助は真顔で、微酔の頭を掉った。

「途方もねえ、見当違い、山また山を遥に離れた、峰々、

谷々……と言えばね、山の中に島々と言う処がありまさ、おかしいね。いやもっと、深い、松本から七里も深へ入った、飛騨の山中――心細い処で……それでも小学校もありゃ、郵便局もありましたっけが、それなんぞも焼けていたんでございましてね。

　山坂を踏越えて、少々平な盆地になった、その温泉場へ入りますと、火沙汰はまた格別、……酷いもので、村はずれには、落葉、枯葉、焼灰に交って、獦子鳥、頬白、山雀、鶸、小雀などと言う、紅だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交って、あの綺麗な小鳥どもが、路傍にはらはらと落ちている。こいつあ、それ、時節が今

頃になりますと、よく、この信州路、木曾街道の山家には、暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げて、美しい手鞠（てまり）が縺（もつ）れたように売ってるやつだて。それが、お前さん、火事騒ぎに散らかったんで――驚いたのは、中に交って、鴛鴦（おしどり）が二羽……番（つがい）かね。……や、頂きます、ト、ト、ござえやさ。」

と小村さんの酌を、蓋（ふた）するような大（おおき）な掌（てのひら）で請けながら、

「どうもね、捨って抱きたいようでがしたぜ。まさか、池に泳いだり、樹に眠ったのが、火の粉を浴びはしますめえ。売ものが散らばりましたか、真赤（まっか）に染（そま）った木

の葉を枕で、目を眠っていましたよ。
天秤棒一本で、天井へ宙乗（ちゅうのり）でもするように、ふらふらふらふら、山から山を経歴（へめぐ）って……ええちょうど昨年の今月、日は、もっと末へ寄っておりましたが――
この緋葉（もみじ）の真最中（まっさいちゅう）、草も雲も虹（にじ）のような彩色の中を、飽くほど視（み）て通った私（わっし）もね、これには足が停（とま）りました。
なんと……綺麗な、その翼の上も、一重（ひとえ）敷いて、薄（うっす）り、白くなりました。この景色に舞台が換（かわ）って、雪の下から鴛鴦（おしどり）の精霊が、鬼火をちらちらと燃しながら、すっと躍上（せりあが）ったようにね、お前さん……唯今の、その二人の婦（おんな）が、私（わっし）の目に映りました。凄（すご）いように美

しゅうがした。」

と鋳掛屋は、肩を軟（やわらか）に、胸を低うして、更（あらた）めて私たち二人を視（み）たが、

「で、山路へ掛（かか）る、狼温泉の出口を通るんでございますが、場所はソレ件（くだん）の盆地だ。私（わっし）が飲んでいました有合御肴（ありあいおんさかな）というお極（きま）りの一膳めしの前なんざ、小さな原場（はらっぱ）ぐらい小広うございますのに——それでも左右へ並ばないで、前後（あとさき）になって、すっと連立って通ります。

前へ立ったのは、蓑（みの）を着て、竹の子笠を冠（かぶ）っていました。……端折った片褄（かたづま）の友染（ゆうぜん）が、藁（わら）の裙（すそ）に優しくこ

ぼれる、稲束（いなたば）の根に嫁菜が咲いたといった形。ふっさりとした銀杏返（いちょうがえし）が耳許（みみもと）へばらりと乱れて、道具は少し大きゅうがすが、背がすらりとしているから、その眉毛の濃いのも、よく釣合って、抜けるほど色が白い、ちと大柄ではありますが、いかにも体つきの嫋娜（しなやか）な婦（おんな）で、

（今晩は。）

と、通掛（とおりかか）りに、めし屋へ声を掛けて行（ゆ）きました。が、※［＃「火＋發」、174-5］（ぱっ）と燃えてる松明（たいまつ）の火で、おくれ毛へ、こう、雪の散るのが、白い、その頬を殺（そ）ぐようで、鮮麗（あざやか）に見えて、いたいたしい。

いたいたしいと言えば、それがね、素足に上草履（うわぞうり）。あの、旅店（やどや）で廊下を穿（は）かせる赤い端緒（はなお）の立ったやつで——しっとりとちと沈んだくらい落着いた婦（おんな）なんだが、実際その、心も空になるほど気の揉（も）めるわけがあって——思い掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋（わらじ）でなし、中ぶらりに右のつッかけ穿（ばき）で、ストンと落ちるように、旅館から、上草履で出たと見えます。……その癖、一生の晴着というので、母（おっか）さん譲りの裙模様、紋着（もんつき）なんか着ていました。

お話をしますうちに、仔細（しさい）は追々おわかりになりますが——これが何でさ、双葉屋と言って、土地での、

まず一等旅館の女中で、お道さんと言う別嬪（べっぴん）、以前で申せば湯女（ゆな）なんだ。

いや、湯女（ゆな）に見惚（みと）れていて、肝心の御婦人が後（おく）れました。もう一人の方は、山茶花（さざんか）と小菊の花の飛模様のコオトを着て、白地の手拭（てぬぐい）を吹流しの……妙な拵（こしらえ）だと思えば……道理こそ、降りかゝる雪を厭（いと）ったも。お前さん、いま結立（ゆいた）てと見える高島田の水の滴（た）りそうなのに、対に照った鼈甲（べっこう）の花笄（はなこうがい）、花櫛（はなぐし）――この拵（こしらえ）じゃあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、なぜか顔の色が透き通りそうに血が澄んで、品のいいのが寂しく見えます。華奢（きゃしゃ）な事は、吹つけるほどでは

なくても、雪を持った向風にゃ、傘も洋傘も持切れますめえ、被りもしないで、湯女と同じ竹の子笠を胸へ取って、襟を伏せて、俯向いて行きます。……袖の下には、お位牌を抱いて葬礼の施主に立ったようで、こう［＃「こう」は底本では「かう」］正しく端然とした処は、視る目に、神々しゅうございます。何となく容子が四辺を沈めて、陰気だけれど、気高いんでございますよ。

　同じ人間もな……鑄掛屋を一人土間で飲らして、納戸の炬燵に潜込んだ、一ぜん飯の婆々媽々などと言う徒は、お道さんの（今晩は。）にただ、（ふわ、）と言っ

たきりだ。顔も出さねえ。その（ふわ、）がね、何の事アねえ、鼠の穴から古綿が千断（ちぎ）れて出たようだ。」

「ちと耳が疼（いた）いだな。」

と饂飩屋の女房が口を入れた、——女房は鋳掛屋の話に引かれて、二階の座に加わっていたのである。

「そのかわり大まかなものだよ。店の客人が、飲さしの二合壜（びん）と、もう一本、棚より引攫（ひっさら）って、こいつを、丼へ突込（つっこ）んで、しばらくして、婦人（おんな）たちのあとを追ってぶらりと出て行くのに、何とも言わねえ。山は深い、旦那方のおっしゃる、それ、何とかって、山中暦日なしじゃあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間

がめでてえね。」
「ははあ。」
「成程。」
私たちは、そんな事は徒(あだ)に聞いて、さきを急いだ。
「荷はどうしたよ。」
と女房が笑って言った。
「ほい忘れた。いや、忘れたんじゃあねえ、一ぜん飯に置放(おきツぱな)しよ。」
「それ見たか、あんな三味線だって、壜詰(びんづめ)二升ぐらいな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」
「うむ、まったくな。」

と藤助は額を圧（おさ）えて、

「おめでてえのはこっちだっけ、はッはッはッ。」

四

「さて旦那方、洒落（しゃれ）や串戯（じょうだん）じゃあねえんでございます。……御覧の通り人間の中の変な蕈（きのこ）のような、こんな野郎にも、不思議なまわり合せで、その婦（おんな）たちのあとを尾（つ）けて行（ゆ）かなけりゃならねえ一役ついていたのでございましてね。……乗掛（のりかか）った船だ。鬱陶（うっとう）しくもお聞きなせえ。」

すっと被(かぶ)りで、

襟を敲(たた)いて、

「どんつくで出ましたわ……見えがくれに行(ゆ)く段取だから、急ぐにゃ当らねえ。別して先方(さき)は足弱だ。はてな、ここらに色鳥の小鳥の空蟬(うつせみ)、鴛鴦(おしどり)の亡骸(なきがら)と言うのが有ったっけと、酒の勢(いきおい)、雪なんざ苦にならねえが、赤い鼻尖(はなさき)を、頰被(ほおかぶり)から突出して、へっぴり腰で嗅(か)ぐ工合は、夜興引(よこひき)の爺(じじい)が穴一のばら銭(ぜに)を探すようだ。余計な事でございますがね——性(しょう)が知れちゃいましても、何だか、婦(おんな)の二人の姿が、鴛鴦の魂がスッと抜出したようでなりませんや。この辺だっけと、今度は、

雪まじりに鳥の羽より焼屑が堆い処を見着けて、お手向にね、罎の口からお酒を一雫と思いましたが、待てよと私あ考えた、正覚坊じゃアあるめえし、鴛鴦が酒を飲むやら、飲ねえやら。いっその事だと、手前の口へね、喇叭と遣った……こうすりゃ鳥の精がめしあがると同じ事だと……何しろ腹ン中は鴛鴦で一杯でございました。」

女房が肥った膝で、畳に当って、

「藤助さんよ。」

「ああ。」

「酒の話じゃあないじゃあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、そこで。」

と、促せば、

「と二人はもう雑木林の崖に添って、上りを山路（やまみち）に懸（かか）っています。白い中を、ふっふっと、真紅（まっか）な鳥のたつように、向うへ行（ゆ）く。……一軒、家だか、穴だか知れねえ、えた、非人の住んでいそうな、引傾（ひっかし）いだ小屋に、筵（むしろ）を二枚ぶら下げて、こいつが戸になる……横の羽目に、半分ちぎれた浪花節（なにわぶし）の比羅（びら）がめらめらと動いているのがありました、それが宿（しゅく）はずれで、もう山になります。峠を越すまで、当分のうち家らしいものはございませんや。

水の音が聞えます。ちょろちょろ水が、青いように冷く走る。山清水の小流（こながれ）のへりについてあとを慕いながら、いい程合で、透かして見ると、坂も大分急になった石磈道（いしころみち）で、誰がどっちのを解いたか、扱帯（しごき）をな、一条（ひとすじ）、湯女（ゆな）の手から後（うしろ）に取って、それをその少（わか）い貴婦人てった高島田のが、片手に控えて縋（すが）っています……もう笠は外して脊へ掛けて……絞（しぼり）の紅（あか）いのがね、松明（たいまつ）が揺れる度に、雪に薄紫に颯（さっ）と冴（さ）えながら、螺旋（らせん）の道条（みちすじ）にこう畝（うね）ると、そのたびに、崖の緋葉（もみじ）がちらちらと映りました、夢のようだ。

視（み）る奴（やつ）の方が夢のようだから、御当人たちは現（うつつ）か

も知れねえ。

でその二人は、そうやって、雪の夜道を山坂かけて、どこへ行くんだと思召（おぼしめ）す。

ここだて——旦那。」

藤助は息継（いきつぎ）に呷（ぐい）と煽（あお）って、

「この二階から、鏡台山を——（少し薄明りが映（さ）しますぜ、月が出ましょう。まあ、御緩（ごゆる）りなさいまし、）——それ、こうやって視（み）るように、狼温泉の宿はずれの坂から横正面といった、肩でこう捻向（ねじむ）いて高く上を視る処に、耳はねえが、あのトランプのハアト形に頭（かしら）を押立（おった）った梟（ふくろ）ヶ嶽（たけ）、梟、梟と一口に称（とな）えて、何嶽と言う

ほどじゃねえ、丘が一座(ひとくら)、その頂辺(てっぺん)に、天狗の撞木杖(しゅもくづえ)といった形に見える、柱が一本。……風の吹まわしで、松明の尖(さき)がぼっと伸びると、白くなって顕(あらわ)れる時は、耶蘇(ヤソ)の看板の十字架てったやつにも似ている……こりゃ、もし、電信柱で。

蔭に隠れて見えねえけれど、そこに一張天幕(ひとはりテント)があります。何だと言うと、火事で焼けたがために、仮ごしらえの電信局で、温泉場から、そこへ出張(でば)っているのでございます。

そこへ行くんだね、婦(おんな)二人は。

で、その郵便局の天幕の裡(うち)に、この湯女(ゆな)の別嬪(べっぴん)が、

生命（いのち）がけ二年越（ごし）に思い詰めている技手の先生……ともう一人は、上州高崎の大資産家（おおかねもち）の若旦那で、この高島田のお嬢さんの婿さんと、その二人が、いわれあって、二人を待って、対の手戟（てぼこ）の石突（いしづき）をつかないばかり、洋服を着た、毘沙門天（びしゃもんてん）、増長天（ぞうちょうてん）という形で、五体を緊（し）めて、殺気を含んで、呼吸（いき）を詰めて、待構えているんでがしてな。

　お嬢さんの方は、名を縫子さんと言うんで、申さずとも娘ッ子じゃありません、こりゃ御新姐（ごしんぞ）……じゃあねえね――若奥様。」

五

峰の白雪、麓（ふもと）の氷、
今は互に隔てていれど、
やがて嬉しく、溶けて流れて、
合うのじゃわいな。……

「私（わっし）は日暮前に、その天幕張（テントばり）の郵便局の前を通って来たんでございますよ。……ちょうど狼の温泉へ入込（いりこ）みます途中でな。……晩に雪が来ようなどとは思いも着かねえ、小春日和（こはるびより）といった、ぽかぽかした好（い）い天気。……

　もっとも、甲州から木曾街道、信州路を掛けちゃあ、麓（ふもと）の岐路（えだみち）を、天秤（てんびん）で、てくてくで、路傍（みちばた）の木の葉がね、あれ性（しょう）の、いい女の、ぽうとなって少し唇の乾いたという容子（ようす）で、へりを白くして、日向（ひなた）にほかほかしていて、草も乾燥（はしゃ）いで、足のうらが擽（くすぐ）ってえ、といった陽気でいながら、槍（やり）、穂高、大天井、やけに焼（やけ）ケ嶽などという、大薩摩（おおざつま）でもの凄（すご）いのが、雲の上に重（かさな）って、天に、大波を立てている、……裏の峰が、たちまち颯（さっ）と暗くなって、雲が被（かぶ）ったと思うと、箕（み）で煽（あお）るように前の峰へ畝（うね）りを立ててあびせ掛けると、浴びせておいて晴れると思えば、その裏の峰がもう晴れた処から、ひ

だを取って白くなります。見る見るうちに雪が掛(かか)るんでございましてね。左右の山は、紅くなったり、黄色かったり、酔ったり、醒(さ)めたりして、移って来るそのむら雲を待っている。

といった次第(わけ)で、雪の神様が、黒雲の中を、大(おおき)な袖を開いて、虚空を飛行(ひぎょう)なさる姿が、遠くのその日向の路に、螽斯(ばった)ほどの小さな旅のものに、ありありと拝まれます。

だから、日向で汗ばむくらいだと言った処で、雑樹一株隔てた中には、草の枯れたのに、日が映(さ)すかと見れば、何、瑠璃色(るりいろ)に小さく凝(こ)った竜胆(りんどう)が、日中(ひなか)も冷い

白い霜を噛(か)んでいます。

が、陽の赤い、その時梟ヶ嶽は、猫が日向ぼっこをしたような形で、例の、草鞋(わらじ)も脚絆(きゃはん)も擽(くすぐ)ってえ。……満山のもみじの中(うち)に、もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がぽかぽかする。……芳(かんば)しい落葉の香のする日の影を、まともに吸って、くしゃみが出そうなのを獅噛面(しかみづら)で、

（鋳掛……錠前の直し。）

　すくッと立った電信柱に添って、片枝折れた松が一株、崖へのしかかって立っています、天幕張だろうが、掘立小屋だろうが、人さえ住んでいれば家業冥利(みょうり)……

（鋳掛……錠前直し。）……

と、天幕とその松のあります、ちょっと小高くなった築山（つきやま）てった下を……温泉場の屋根を黒く小さく下に見て、通りがかりに、じろり……」

藤助は、ぎょろりとしながら、頬辺（ほっぺた）を平手で敲（たた）いて、

「この人相だ、お前さん、じろりとよりか言いようはねえてね、卜行（や）った時、はじめて見たのが湯女のその別嬪だ。お道さんは、半襟の掛った縞の着ものに、前垂掛（まえだれがけ）、昼夜帯、若い世話女房といった形で、その髪のいい、垢抜（あかぬけ）のした白い顔を、神妙に俯向（うつむ）いて、麁末（そまつ）な椅子に掛けて、卓子（テエブル）に凭掛（よりかか）って、足袋を繕っていま

したよ、紺足袋を……

（鋳掛……錠前の直し。）……

ちょっと顔を上げて見ましたっけ。直（すぐ）に、じっと足袋を刺すだて。

動いただけになお活（い）きて、光沢（つや）を持った、きめの細（こま）かな襟脚の好（よ）さなんと言っちゃねえ。……通り切れるもんじゃあねえてね、お前さん、雲だか、風だか、ふらふらと野道山道宿なしの身のほまちだ。

一言（ひとこと）ぐらい口を利いて、渋茶の一杯も、あのお手からと思いましたがね、ぎょっとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に真直（まっすぐ）に立った看板だ。電信局としてあ

る……

茶屋小屋、出茶屋の姉さんじゃあねえ。風俗はこの目で確に睨んだが……おやおや、お役人の奥様かい。

……郵便局員の御夫人かな。

これが旦那方だと仔細ねえ。湯茶の無心も雑作はねえ。西行法師なら歌をよみかける処だが、山家めぐりの鋳掛屋じゃあ道を聞くのも跋が変だ。

ところで、椅子はまだ二三脚、何だか、こちとらにゃ分らねえが、ぴかぴか機械を据附けた卓子がもう一台。向ってきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

ははあ、来る道で、向（むこう）の小山の土手腹（どてっぱら）に伝わった、電信の鋼線（はりがね）の下あたりを、木の葉の中に現れて、茶色の洋服で棒のようなものを持って、毛虫が動くように小さく歩行（ある）いている形を視（み）た。……鉄砲打の鳥おどしかと思ったが、大きにそんなのが局員の先生で、この姉さんの旦那かも知れねえよ。

が何しろ留守だ。

（鋳掛……錠前直し。）……

と崖ぶちの日向（ひなた）に立ったが、紺足袋の繕い。……雪の襟脚、白い手だ。悚然（ぞっ）とするほど身に沁みてなりませんや。

遥(はるか)に見える高山の、かげって桔梗色(ききょういろ)したのが、すっと雪を被(かつ)いでいるにつけても。で、そこへまず荷をおろしました。

（や、えいとこさ。）と、草鞋(わらじ)の裏が空へ飜(かえ)るまで、山端(やまばた)へどっしりと、暖かい木の葉に腰を落した。

間拍子もきっかけも渡らねえから、ソレ向うの嶽(たけ)の雪を視(み)ながら、

（ああ、降ったる雪かな。）

とか何とか、うろ覚えの独言(ひとりごと)を言ってね、お前さん、

（それ、雪は鵝毛(がもう)に似て飛んで散乱し、人は鶴氅(かくしょう)を着て立って徘徊(はいかい)すと言えり……か。）

なんのツて、ひらひらと来る紅色(べにいろ)の葉から、すぐに吸いつけるように煙草(たばこ)を吹かした。が、何分にも鋳掛屋じゃあ納(おさま)りませんな。

ところでさて、首に巻いた手拭(てぬぐい)を取って、払(はた)いて、馬士(まご)にも衣裳(いしょう)だ、芳原かぶりと気取りましたさ。古三味線を、チンとかツンとか引搔鳴(ひっかきな)らして、ここで、内証で唄ったやつでさ。

峰の白雪、麓の氷——

旦那、顔を見っこなし……極(きまり)が悪い……何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せようという腹だ、おかしな腹だ、狸(たぬき)の腹だね。

だが、こいつあこちとら徒（であい）の、すなわち狸の腹鼓という甘術（あまて）でね。不気味でも、気障（きざ）でも、何でも、聞く耳を立てるうちに、うかうかと釣出されずにゃいねえんだね。どうですえ、……それ、来ました。」

と不意に振向く、階子段（はしごだん）の暗い穴。

小村さんも私も慄然（ぞっと）した。

女房はなおの事……

「あれ、吃驚（びっくり）した。」

と膝で摺寄（すりよ）る。

藤助は一笑して、

「まずは、この寸法でございましてね、お道さんを引

寄せた工合というのが、あはッはッ。」

六

「見ない振(ふり)、知らない振、雪の遠山(とおやま)に向いて、……溶けて流れてと、唄っていながら、後方(うしろ)へ来るのが自然と分るね、鹿の寄るのとは違います。……別嬪の香(かおり)がほんのりで、縹緻(きりょう)に打たれて身に沁む工合が、温泉の女神様(おんながみさま)が世話に砕けて顕(あらわ)れたようでございましたぜ。……（逢いたさに見たさに）何とか唄(や)って、チャンと句切ると、

（あの、鋳掛屋さん。）

と、初音（はつね）だね。……

視（み）ると、朱塗の盆に、吸子（きびしょ）、茶碗を添えて持っている。黒繻子（くろじゅす）の引掛帯（ひっかけおび）で、浅葱（あさぎ）の襟のその様子が何とも言えねえ。

いえ、もう一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々というのが載（の）っていました。……それがために讃（ほ）めるんじゃあねえけれど、拵（こしら）えねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰ったこっちの芳原かぶりなんざ、もの欲しそうで極（きま）りが悪くなったくらいで。

（へい、へい、へい、こりゃ奥様、恐入りました。）

とわざとらしくも、茶碗をな、両手で頂かずにゃいられなかった。

姉さんが、初々しい、しおらしい事を、お聞きなさえ、ぽうッとなって、

（まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。）

さ、その奉公人風情が、生意気のようだけれど、唄をもう一つ唄って聞かしてもらえまいか、と言うんじゃありませんかい。お誂が註文にはまった。こんな処でよろしければ、山で樹の数、幾つだって構やしませんと、……今度は（浮世はなれて奥山ずまい、恋もりん気も忘れていたが、）……で御機嫌を取結ぶと、

それよりか、やっぱり、先の（やがて嬉しく溶けて流れて合うのじゃわいな）の方を聞かして欲しいと、山姫様、御意遊ばす。」

藤助は杯でちょっと句切って、眉も口も引緊った。

「旦那方の前でございますがね、こう中腰に、〆加減の好い帯腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくようにして熟と聞く。……聞手が、聞手だ。唄う方も身につまされて、これでもお前さん、人間交際もすりゃ、女出入も知らねえじゃあねえ。少い時を思い出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、ついぞねえ、一生に一度だ。較べものにゃ

ありませんが、むかし琵琶法師（びわほうし）の名誉なのが、こんな処で草枕、山の神様に一曲奏でた心持。

と姉さんがとけて流れて合うのじゃわいなと、きき入りながら、睫毛（まつげ）を長くうつむいて、ほろりとした時、こっらも思わず、つい、ほろり……いえさ、この面（つら）だからポタリと出ました。」

　と口では言いつつ声が湿った。

「(つかん事を聞きますけれど、鋳掛屋さん、錠の合鍵（あいかぎ）を頼まれて下さいますか。)……と姉さんがね。

　私（わっし）あこれを聞いて、ポンと両手を拍（う）った。

　このくらいつく事は、私の唄が三味線につくような

もんじゃあねえ。

（鍵が狂ったんでございますかい。）

（いいえ、無いんですけれど。）

（雑作はがあせん、煙草三服飲む間（うち）だ。）

そこで錠前を見て、という事になると、ちと内証事らしい。……しとやかな姉さんが、急に何だか、そわついて、あっちこっち眴（みまわ）しましたが、高い処にこう立つと、風が攫（さら）って、すっと、雲の上へ持って行（ゆ）きそうで危（あぶな）ッかしいように見えます。

勿論人影は、ぽッつりともない。

が、それでも、天幕（テント）の正面からじゃあ、気咎（きとが）めがし

たと見えて、
（済みませんが、こっちから。）
　裏へ廻わると、綻びた処があるので。……姉さんは科よく消えたが、こっちは自雷也の妖術にアリャアリャだね。列子という身で這込みました。が、それどころじゃあねえ。この錠前だと言うのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟆の干物とも、河馬の木乃伊とも譬えようのねえ、皺びて突張って、兀斑の、大古物の大かい革鞄で。

　こいつを、古新聞で包んで、薄汚れた兵児帯でぐるぐると巻いてあるんだが、結びめは、はずれて緩んで、

新聞もばさりと裂けた。そこからそれ、煤(すす)を噴きそうな面(つら)を出して、蘆(あし)の茎(ずい)から谷覗(のぞ)くと、鍵の穴を真黒(まっくろ)に窪ましているじゃアありませんか。

(何が入っておりますえ。)

　失礼な……人様の革鞄を……だが、私(わっし)あつい、うっかり言った。

(あの、旦那さんのお大事なものばかり。)

(へい、貴女(あなた)の旦那様の?)

(いいえ、技師の先生の方ですが、その方のお大事なものが残らず、お国でおかくれになりました奥様のお骨(こつ)も、たったお一人ッ子の、かけがえのない坊ちゃま

のお骨も、この中に入っていらっしゃるんですって。）

と、こう言うんですね。」

小村さんと私は、黙って気を引いて瞳を合した。

藤助は一息ついて、

「それを聞いて、安心をしたくらいだ。技師の旦那の奥様と坊ちゃまのお骨と聞いて、安心したも、おかしなものでございますがね、一軒家の化葛籠（ばけつづら）だ、天幕の中の大革鞄じゃあ、中（うち）に何が入ってるか薄気味が悪かったんで。

（へい、その鍵をおなくしなすった……そいつはお困りで。）

と錠前の寸法を当りながら、こう見ますとね、新聞のまだ残った処に、青錆（あおさび）にさびた金具の口でくいしめた革鞄の中から、紫の袖が一枚。……袂（たもと）が中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々（いきいき）と、女の膚（はだ）を包んだようで、被（き）た人がらも思われる、裏が通って、揚羽（あげは）の蝶の紋がちらちらと羽を動かすように見えました。」

小村さんと私とは、じっと見合っていたままの互の唇がぶるぶると震えたのである。

七

――実はこの時から数えて前々年の秋、おなじ小村さんと、（連がもう一人あった。）三人連で、軽井沢、碓氷のもみじを見た汽車の中に、まさしく間違うまい、これに就いた事実があって、私は、不束ながら、はじめ、淑女画報に、「革鞄の怪。」後に「片袖。」と改題して、小集の中に編んだ一篇を草した事がある。

確に紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覚えている。高島田に花笄の、盛装した嫁入姿の窈窕たる淑女が、その嫁御寮に似もつかぬ、卑しげな慳のある女親まじりに、七八人の附添とともに、深谷駅から同じ室に乗組

んで、御寮はちょうど私たちの真向うの席に就いた。まさに嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らいと、心遣（こころやり）と、恐怖（おそれ）と、笑（えみ）と、涙とは、そのまま膝に手を重ねて、つむりを重たげに、ただ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包んで、顔も上げない。まことにしとやかな佳人であった。

この片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革鞄の口に挟まったのである。……失礼ながらその革鞄は、ここに藤助が饒舌（しゃべ）るのと、ほぼ大差のないものであった。が、持ぬしは、意気沈んで、髯（ひげ）、髪もぶしょうにのび、面（おもて）は憔悴（しょうすい）はしていたが、素純にして、しかも謹

厳なる人物であった。

汽車の進行中に、この出来事が発見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思わぬ麁匆（そそう）であろう、失策した人物に対して、傍（はた）の見る目は寧（むし）ろ気の毒なほどであった。

一も二もない、したたかに詫びて、その革鞄の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

しかるにもかかわらず、その人物は、人々が騒いで掛けた革鞄の手の中から、すかりと握拳（にぎりこぶし）の手を抜くと斉（ひと）しく、列車の内へすっくと立って、日に焼けた面（つら）

は瓦(かわら)の黄昏(たそが)るるごとく色を変えながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の方々、と室内に向って、掠声(かすれごえ)して言った。……これなる窈窕たる淑女（——私もここにその人物の言った言(ことば)を、そのまま引用したのであるが）窈窕たる淑女のはれ着の袖を侵(おか)したのは偶然の麁匆である。はじめは旅行案内を攫出(つかみだ)して、それを投込んで錠を下した時に、うっかり挟んだものと思われる。が、それを心着いた時は——と云って垂々(たらたら)と額に流るる汗を拭(ぬぐ)って——ただ一瞬間に千万無量、万劫(ばんごう)の煩悩を起した。いかに思い、いかに想っても、この窈窕たる淑女は、正(まさ)しく他(ひと)に嫁せらるるので

ある……ばかりでない、次か、あるいはその次の停車場(ステエション)にて下車なさるるとともにたちまち令夫人となららるる、その片袖である。自分は生命を掛けて恋した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すともこの革鞄の片袖はあえて離すまいと思う。思い切って鍵を棄てました。私(わたくし)はこの窓から、遥(はるか)に北の天に、雪を銀襴のごとく刺繍(ししゅう)した、あの遠山(えんざん)の頂を望んで、ほとんど無辺際に投げたのです、と言った。

——汽車は赤城山(あかぎさん)をその巽(たつみ)の窓に望んで、広漠たる原野の末を貫いていたのであった。——

渠(かれ)は電信技師である。立野竜三郎(たつのりゅうざぶろう)と自ら名告(なの)った。

渠（かれ）はもとより両親も何もない、最愛の児（こ）を失い、最愛の妻を失って、世を果敢（はかな）むの余り、その妻と子の白骨と、ともに、失うべからざるものの一式、余さずこの古革鞄に納めた、むしろ我が孤（みひとつ）の煢然（けいぜん）たる影をも納めて、野に山に棄つるがごとく、絶所、僻境（へききょう）を望んで飛騨山中の電信局へ唯今赴任する途中である。すでに我身ながら葬り去った身は、ここに片袖とともに蘇生（よみがえ）った。蘇生ると同時に、罪は死である。否（いや）、死はなお容易（たやす）い、天の咎（とが）、地の責（せめ）、人の制規（おきて）、いかなる制裁といえども、甘んじて覚悟して相受ける。各位が、我（わが）ために刑を撰んで、その最も酷なのは、磔（はりつけ）でない、

獄門でない、牛裂（うしざき）の極刑でもない。この片袖を挟んだ古革鞄を自分にぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬のごとく従わせて、そのまま今日（こんにち）の婿君の脚下に拝し跪（ひざまず）かせらるる事である。諾（よし）、その厳罰を蒙（こうむ）りましょう、断じて自分はこの革鞄を開いて片袖は返さぬのである。ただ、天地神明に誓うのは、貴女（きじょ）の淑徳と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、その姿を視（み）たのはわずかに今より前（ぜん）、約三十分に過ぎない、……包ましくさしうつむかれた淑女は、申すまでもなく、自分に向って瞳をも動かされなかった事を保証する、——謹んで断罪を待ちます……各位。

吶々(とつとつ)として、しかも沈着に、純真に、縷々(るる)この意味の数千言を語ったのが、轟々(ごうごう)たる汽車の中(うち)に、あたかも雷鳴を凌(しの)ぐ、深刻なる独白のごとく私たちの耳に響いた。

附添の数多(あまた)の男女は、あるいは怒り、あるい罵(ののし)り、あるいは呆れ、あるいは呪詛(のろ)った。が、狼狽(ろうばい)したのは一様である。車外には御寮を迎(むかえ)の人数(にんず)が満ちて、汽車は高崎に留まろうとしたのであるから……

既に死灰のごとく席に復して瞑目(めいもく)した技師がその時再び立った。ここに手段があります、天が命ずるにあらず、地が教うるにあらず、人の知れるにあらず、た

だ何ものの考慮とも分らない手段である……すなわち小刀（ナイフ）をもって革鞄を切開く事なのです。……私（わたくし）は拒みません。刀ものは持合せました、と云って、鞘（さや）をパチンと抜いて渡したのを、あせって震える手に取って、慳相（けんそう）な女親が革鞄の口を切裂こうとして、屹（きっ）と猜疑（さいぎ）の瞳を技師に向くると同時に、大革鞄を、革鞄のまま提げて、そのまま下車しようとした時であった。

「いいえ！」

と一言（ひとこと）、その窈窕たる淑女は、袖つけをひしと取って、びりびりと引切（ひっき）った。緋（ひ）の長襦袢（ながじゅばん）が※［＃「火＋發」、192-6］（ぱっ）と燃える、片身を火に焼いたように衝（つッ）と汽車を

出たその姿は、かえって露の滴るごとく、おめき集（つど）う群集は黒煙（くろけむり）に似たのである。

技師は真俯向（まうつむ）けに、革鞄の紫の袖に伏した。

乗合は喝采（かっさい）して、万歳の声が哄（どっ）と起った。

汽車の進むがままに、私たちは窓から視（み）た。人数に抱上げらるるようになって、やや乱れた黒髪に、雪なす小手を翳（かざ）して此方（こなた）を見送った半身の紅（くれない）は、美しき血をもって描いたる煉獄（れんごく）の女精であった。

碓氷の秋は寒かった。

八

藤助は語り継いだ。

「姉（ねえ）さんが、そうすると……驚いたように、

（あれ、それを見ちゃ不可（いけ）ません。）

（やあ、つい麁匆（そそう）を。）

と、何事も御意のまま、頭をすくめて恐縮をしますとね、低声（こごえ）になって気の毒そうに、

（でも、あの、そういう私が、密（そっ）と出して、見たいんでございます。）

（そこで鍵が御入用。）

（ええ、ですけど、人様のものを、お許しも受けない

で、内証で見ては悪うございましょうねえ。）

（何、開けたらまた閉めておきゃあ、何でもありゃしませんや。）

とその容子（ようす）だもの、お前さん、何だって構やしません。――お手軽様に言って退（の）けると、口に袖をあてながら、うっかり釣込まれたような様子でね、また前後（あとさき）を視（み）ましたっけ。

（では、ちょっと今のうち鋳掛屋さん、あなたお職柄で鍵を拵（こしら）えるより前（さき）に、手で開けるわけには参りませんの。）

ぶるぶるぶるぶる……私（わっし）あ、頭と嘴（くちばし）を一所に振った。

旦那の前（めえ）だが、……指を曲げて、口を押えて、瞼（まぶた）へ指の環を当がって、もう一度頭を掉（ふ）った。それ、鍵の手は、内証で遣（や）っても、たちまちお目玉。……不可（いけ）えてんだ、お前さん。

（御法度（ごはっと）だ。）

　と重く持たせて、

（ではござれども、姉さんの事だ、遣らかしやしょう、大達引（おおたてひき）。奥様のお記念（かたみ）だか、何だか知らねえ。成程こいつあ、そのな、ヘッヘッ、誰方（どなた）かに向っての姉さんの心意気では……お邪魔になるでございましょうよ。奥歯にものが挟まったって譬（たとえ）はこれだ。すっぱり、

打開（ぶちま）けてお出しなせえまし。）
（いえ、あの、開けて出すよりか、私が中へ入りたい。）
と仇気（あどけ）なく莞爾（にっこり）すら、チェーしたもんだ。
（御串戯（ごじょうだん）で、中へ入ると、恐怖（おっかね）え、その亡くなった奥さんの骨（こつ）があるんじゃありませんかい。）
（もう、私は、あの、奥さまの、その骨（ほね）になりたいの。）
ああ、その骨になりたいか、いや、その骨でこっちは海月（くらげ）だ、ぐにゃりとなった。
（御勝手だ。）
（あれ、そのかわりに奥さまが、活きた私におなんなさる、容色（きりょう）は、たとえこんなでも。）

（御勝手だ。いや、御法度だね。）
（そんな事を言わないで、後生ですから、鋳掛屋さん。）
（開けますよ。だがね……）
と、一つ勿体《もったい》で、
（こいつあ口伝《くでん》だ、見ちゃ不可《いけ》え、目を瞑《つぶ》っていておくんなさい。）
（はい。）
（もっと。）
（はい。）
（不可《いけ》え不可え、薄目を開けてら。）
（まあ、では後を向きますわ。）

（引しまって、ふっくりと柔かで、ああ、堪らねえ腰附だ。）

（可厭……知りませんよ。）

と向直ると、串戯の中にしんみりと、

（あれ、ちょっと待って下さいまし。いま目をふさいで考えますと、お許がないのに錠前を開けるのは、どうも心が済みません。神様、仏様に、誓文して、悪い心でなくっても、よくない事だと存じます。）

私も真面目にうなずきました。

（でも、合鍵は拵えて下さいまし、大事にそれを持っていて、……出来るだけ我慢はしますけれども、どう

しても開けたくってならなくなりました時に、生命（いのち）にかえても、開けて見とうございますから。）――晩の泊（とまり）はどこだって聞きますから、向うの峰の日脚を仰向（あおむ）いて、下の温泉だと云いますとね、双葉屋の女中だと、ここで姉さんが名を言って、お世話しましょうと、きつい発奮（はずみ）さ。

　御旅館などは勿体ねえ、こちとら式がと木賃がると、今頃はからあきで、人気（ひとけ）がなくって寂しいくらい。でも、お一方――一昨日（おととい）から、上州高崎の方だそうだけれど、東京にも少（すくな）かろう、品のいい美しい、お嬢さんだか、夫人（おくさま）だか、少（わか）い方がお一方……」

「お一方？」

と、うっかり訊(き)いて私は膝を堅うした。——小村さんも同じ思いは疑いない。——あの時、その窈窕たる御寮が、汽車を棄てたのは、かしこで、その高崎であった。

「さようで。——お一方御逗留(ごとうりゅう)、おさみしそうなその方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となくそのお一方が、もっての外気になるようで、妙に眉のあたりを暗くしましたっけ、熟(じっ)と日のかげる山を視(なが)めたが、

（ああ。鋳掛屋さん。）

と慌(あわただ)しい。……皆まで聞かずと飲込んだ、旦那様

帰り引［＃「引」は小文字］と……ここらは鵜(う)だてね、天幕(テント)の逢目(あいめ)をひょこりと出た。もとの山端(やまっぱな)へ引退(ひきさが)り、さらば一服仕(つかまつ)ろう……つぎ置の茶の中には、松の落葉と朱葉(もみじ)が一枚。……」

（ああ、腹が減った……）

と色気のない声を出して、どかりと椅子に掛けたのは、焦茶色の洋服で、身の緊(しま)った、骨格のいい、中古(ちゅうぶる)の軍人といった技師の先生だ。――言うまでもなく、立野竜三郎は渠(かれ)である――

（減った、減った、無茶に減った。）

と、いきなり卓子(テエブル)の上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも竹の子弁当。……御存じはございますまい、三組(みつぐみ)の食籠で、畳むと入子(いれこ)に重(かさな)るやつでね。案ずるまでもありませんや、お道姉さんが心入れのお手料理か何かを、旅館から運ぶんだね。

（うまい、ああ旨(うま)い、この竹輪は骨がなくて難有(ありがた)い。）

余り旨そうなので、こっちは里心が着きました。建場(たてば)々々で飲酒(や)りますから、滅多に持出した事のない仕込の片餉(かたげ)、油揚(あぶらげ)の煮染(にしめ)に沢庵というのを、もくもくと頬張りはじめた。

お道さんが手拭を畳んでちょっと帯に挟んだ、

茶汲女（ちゃくみおんな）という姿で、湯呑を片手に、半身で立って私（わっし）の方を視（み）ましたがね。

（旦那様（だんなさん）……あの、鋳掛屋さんが、お弁当を使いますので、お茶を御馳走（ごちそう）いたしました。……お盆がなくて手で失礼でございます。）

と湯気の上る処を、卓子の上へ置くんでございますがね、加賀の赤絵の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉しい心意気だ。

（何、鋳掛屋。）

と、何だか、気を打ったように言って、先生、扁平（ひらた）

い肩で捻じて、私の方を覗きましたが、
（やあ、御馳走はありますか。）
とかすれ笑いをしなさるんだ。
（ヘッ、ヘッ。）と、先はお役人様でがさ、お世辞笑
をしたばかりで、こちらも肩で捻向く面だ、道陸神の
首を着換えたという形だてね。
（旨い。）
姉さんが嬉しそうな顔をしながら、
（あの、電信の故障は、直りましてございますか。）
（うむ、取払ったよ。）
と頬張った含声で、

（思ったより余程さきだった。）
ははあ、電線に故障があって、障（さわ）るものの見当が着いた処から、先生、山めぐりで見廻ったんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻って来た時に、段々塗の旗竿（はたざお）を、北極探検の浦島といった形で持っていて、かたりと立掛けて入（へえ）んなすった。
（どうかなっていましたの。）
（変なもの……何、くだらないものが、線の途中に引掛（ひっからま）って……）
カラリと箸（はし）を投げる音が響いた。
（うむ、来た。……トーン、トーン……可（よ）し。）

お道さんの声で、

（旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。）

一口がぶりと茶を飲んで、

（詰らぬ事を……他所へ来た電報に、一々気を揉んでいて堪るもんですか。）

（でも、先刻、この電信が参りました時、何ですか、お顔の色が……）

（……故障のためですよ、青天井の煤払は下さりませんからな、は、は。）

と笑った。

坂をするすると這上る、蝙蝠か、穴熊のようなのが、

衝(つッ)と近く来ると、海軍帽を被(かぶ)ったが、形(なり)は郵便の配達夫――高等二年ぐらいな可愛い顔の少年が、ちゃんと恭(うやうや)しく礼をした。

(ああ、ちょうどいま繋(つな)った。)

(どうした故障でございますか。)

と切口上で、さも心配をしたらしい。たのもしいじゃあございませんか。

(網掛場(あみかけば)の先の処だ、鳥を蛇が捲(ま)いたなりで、電線に引搦(ひっからま)って死んでいたんだよ。鳥が引啣(ひきくわ)えて飛ぼうとしたんだろう……可なり大(おおき)な重い蛇だから、飛切れないで鋼線(はりがね)に留った処を、電流で殺されたんだ。ぶら

下った奴は、下から波を打って鎌首をもたげたなりに、黒焦(くろこげ)になっていた——君、急いでくれ給え、約四時間延着だ。)

(はっ。)

と云って行(ゆ)くのを、

(ああ、時さん。)

とお道さんは沈んで呼んだ。が、寂しい笑顔を向け直して、

(配達さん——どこへ……)と訊(き)いた。

少年が正しく立停(たちとど)まって、畳んだ用紙を真(まっ)すぐに視(み)て、

（狼温泉――双葉館方……村上縫子……）
（そしてどちらから。）
（ヤホ次郎――行って来ます。）
（そんな事を聞くもんじゃあない。）
（ああ、済みませんでした。）
（何、構わないようなもんじゃあるがね――どっこいしょ。）
がた、がたんと音がする。先生、もう一つの卓子を引立って、猪と取組むように勢よく持って出ると、お道さんはわけも知らないなりに、椅子を取って手伝いながら、

（どう遊ばすの。）

と云ううちに、一段下りた草原（くさっぱら）へ据えたんでござ
いますがね、――わけも知らずに手伝った、お道さん
の心持を、あとで思うと涙が出ます。」

と肩もげっそりと、藤助は沈んで言った。……

「で、何でございますよ――どう遊ばすのかと、お道
さんが言うと、心待、この日暮にはここに客があるか
も知れんと、先生が言いますわ。あれ、それじゃこん
な野天でなく、と、言おうじゃあございませんか。

（いや、中で間違（まちがい）があるとならんので。）

（え、間違とおっしゃって。）

とお道さんが、ひったり寄った。

（私は、）

と先生は、肘（ひじ）で口の端（はた）を横撫（よこなで）して、

（髯（ひげ）もまずいが、言う事がまずくて不可（いか）んです。間違じゃあない、故障です、素人は気なしだからして、あんな狭い天幕の中で、器械にでも障って、また故障にでもなると不可んのだ。決して心配な事ではないのです、――さあ飯だ、飯だ。）

と今度はなぜか、箸を着けずに弁当をしまいかけて、

……親方の手前もある、客に電報が来た様子では、また和女（おまえ）の手も要るだろう、余り遅くならないうちにと、

懇に言うと、

（はい、はい。）

と柔順に返事する。片手間に、継掛けの紺足袋と、寝衣に重ねる浴衣のような洗濯ものを一包、弁当をぶら下げて、素足に藁草履、ここらは、山家で——悄々と天幕を出た姿に、もう山の影が薄暗く隈を取って映りました。

（今、何時だろう。）

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

（……四時半頃にもなりましょうか。）

（時計が止ったよ——気をつけておいで。）

と大(おおき)な懐中時計と、旗竿の影を、すっくり立って、片頬(かたほ)夕日を浴びながら、熟(じっ)と落着いて視(なが)めていなさる。……落着いて視(み)ちゃあいなすったが、先生少々どうかなさりやしねえのかと思ったのは、こう変に山が寂しくなって、通魔(とおりま)でもしそうな、静寂(しじま)の鐘の唄の塩梅(あんばい)。どことなくドン――と響いて天狗倒(てんぐだおし)の木精(こだま)と一所に、天幕の中(うち)じゃあ、局の掛時計がコトリコトリと鳴りましたよ。

お地蔵様が一体、もし、この梟ケ嶽の頭を肩へ下り口に立ってござる。――私(わっし)どもは、どうかすると一日(いちんち)の中(うち)にゃ人間の数より多くお目に掛(かか)る、至極可懐(なつか)

しいお方だが……後で分りました。この丘は、むかし、小さな山寺があったあとだそうで、そう言や草の中に、崩れた石の段々が蔦（つた）と一所に、真下の径（こみち）へ、山懐（やまぶところ）へまとっています。その下の径というのが、温泉宿（ゆのやど）入りの本街道だね。

お道さんが、帰りがけに、その地蔵様を拝みました。石の袈裟（けさ）の落葉を払って、白い手を、じっと合せて、しばらくして、

（また、お目にかかります。）

と顔を上げて、

（後程に――）

もう先生は天幕へ入った――で、私（わっし）にしみじみとした調子で云った時の面影が忘れられねえ！……睫毛（まつげ）にたまって、涙が一杯。……風が冷く、山はこれから、湿っぽい。

秋の日は釣瓶（つるべ）落しだ、お前さん、もうやがて初冬（はつふゆ）とは言い条、別して山家だ。静（しずか）に大沼の真中（まんなか）へ石を投げたように、山際へ日暮の波が輪になって颯（さっ）と広がる中で、この藤助と云う奴が、何をしたと思召（おぼしめ）す。

三尺をしめ直す、脚絆の埃（ほこり）を払（はた）いたり、荷づなを天秤（てんびん）に掛けたり、はずしたり。……三味線の糸をゆるめたり、袋に入れたり……さてまた袋を結んだり。

そこへ……いまお道さんが下りました、草にきれぎれの石段を、攀じ攀じ、ずッと上って来た、一個、年紀の少い紳士があります。

山の陰気な影をうけて、凄いような色の白いのが、黒の中折帽を廂下りに、洋杖も持たず腕を組んだ、背広でオオバアコオトというのが、色がまた妙に白茶けて、うそ寂しい。瘠せて肩の立った中脊でね。これが地蔵様の前へ来て、すっくりと立ったと思うと、頭髪の伸びた技師の先生が、ずかずかと天幕を出ました。

それ、卓子を中に、控えて、開いて、屹と向合ったと思召せ。

少（わか）い紳士（だんな）が慇懃（いんぎん）に、

（失礼ですが、立野竜三郎氏でいらっしゃいますか。）

（さよう、お尋ねを蒙（こうむ）りました竜三郎、私（わたくし）であります。）

（申しおくれました、私は村上八百次郎（やおじろう）と申すものです。はじめてお目にかかります……唯今、名刺を。）

（いや。）

と先生、卓子の上へ両手をずかと支（つ）いて、

（三年前（ぜん）から、御尊名は、片時といえども相忘れません、出過ぎましたが、ほぼ、御訪問［＃「訪問」は底本では「訪門」］に預りました御用向（ごようむき）も存じております。）

と、少いのが少し屹となって、

（用向を御存じですか？）

（まず、お掛け下さい。）

と先生は、ドカリと野天の椅子に掛けた。

何となく気色ばんだ双方の意気込が、殺気を帯びて四辺を払った。この体を視た私だ。むかし物語によくあります、峰の堂、山の祠で、怪しく凄い神たちが、神つどいにつどわせたという場所へ、破戒坊主が、はい蹲ったという体で、可恐し可恐し、地蔵様の前に踞んで、こう、伏拝む形をして、密と視たんで。

先生は更めて、両手を卓子につき直して、

「――受信人、……狼温泉二葉屋方、村上縫子、発信人は尊名、貴姓であります。

　コンニチゴゴツク。ヨウイ（今日午後着く。用意）」

　と聞きも済まさず、若い紳士（だんな）は、斜（ななめ）に衝（つ）と開いて、身構えて、

（何、私信を見た上、用件を御承知になりましたな。）

「偏（ひとえ）に申訳をいたします。電報を扱います節、文字（もんじ）は拾いますが、文字は普通……拾いますが、職務の徳義として、文字は綴りましても、用件は記憶しません。しかるところ、唯今申上げました（コンニチゴゴツク、

ヨウイ）で、不意に故障が起りました、幾度も接続を試みますうちに、うかと記憶に残ったのです。のち四時間、やっと電線が恢復（かいふく）して（ヨキカ）と受信しましたのです。謹んで謝罪いたします。」

と面（おもて）を上げ、乾（から）びた咳（せき）して、

「すなわち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子。発信人、尊名、貴姓、すなわち、（今日午後着く。用意よきか。）」

（分りました。）

と静（しずか）に言う時、ふと見返った目が、私（わっし）に向いた、と一所にな……先生の眼（まなこ）も光りました。

怯(おび)えて立ったね、悚然(ぞっと)した。

荷を担いで、ひょうろ、ひょろ。

ようやく石段の中ほどで、吻(ほっ)と息をして立った処が、薄暮合(うすくれあい)の山の凄(すご)さ。……天秤かついだ己(うぬ)が形(なり)が、何でございますかね、天狗様の下男が清水を汲みに山一つ彼方(あなた)へといった体(てい)で、我ながら、余り世間離れがした心細さに、

(ほっ、)

と云ったが、声も、ふやける。肩をかえて性根だめしに、そこで一つ……

(鋳掛――錠前の直し。)――

何と――旦那。」

九

「……時に――雪の松明（たいまつ）が二把（わ）。前後（あとさき）に次第に高くなって、白い梟（ふくろ）、化梟、蔦葛（つたかずら）が鳥の毛に見えます、その石段を攀（よ）じるのは、まるで幻影（まぼろし）の女体が捧げて、頂の松、電信柱へ、竜燈が上（あが）るんでございました。

　上り果てた時分には、もう降っているのが止（や）みましたっけ。根雪に残るのじゃあございません、ほんの前触れで、一きよめ白くしましたので、ぼっとほの白く、

薄鼠に、梟の頂が暗夜(やみ)に浮いて見えました。

苦しい時ばかりじゃあねえ。こんな時も神頼み、で、私(わっし)は崖縁(がけぶち)をひょいと横へ切れて、のしこと地蔵様の背後(うしろ)に蹲(しゃが)み込んで覗(のぞ)いたんで。石像のお袈裟(けさ)の前へは、真白(まっしろ)に吹掛けましたが、うしろは苔(こけ)のお法衣(ころも)のまま真黒(まっくろ)で、お顔が青うございましたよ。

大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕に引籠(ひきこも)ったんでございましょう。卓子(テエブル)ばかりで影もない。野天のその卓子が、雪で、それ大理石。――立派やかなお座敷にも似合わねえ、安火鉢の曲(ゆが)んだやつが転がるように出ていました。

その火鉢へ、二人が炬火（たいまつ）をさし込みましたわ。一ふさり臥（ふさ）って、柱のように根を持って、赫（かっ）と燃えます。その灯（あかり）で、早や出端（でばな）に立って出かかった先生方、左右の形は、天幕がそのままの巌石（がんせき）で、言わねえ事じゃあねえ、青くまた朱に刻みつけた、怪しい山神（さんじん）に、そっくりだね。

ツツとあとへ引いて、若い紳士（だんな）が、卓子に、さきの席を取って、高島田の天人を、

（縫子さん。）

と呼びました。

御婦人が、髪の吹流（ふきながし）を取った、気高い顔は、松明の

火に活々と、その手拭で、お召のコオトの雪を払っていなすったけ、揺れて山茶花が散るようだ。

（立野さんに御挨拶をなさい。）

（唯今。）

と静に言って、例の背後に掛けた竹の子笠を、紐を解いて、取りましたが、吹添って、風はあるのに、気で鎮めたかして、その笠が動きもしません。

卓子の脚に、お道さんのと重ねて置いて、

（貴方——御機嫌よう。）

（は。）

と先生は一言云ったきり、顔も上げないで、めり込

むように深く卓子の端についた太い腕が震えたが、それより深いのは、若旦那の方の年紀（とし）とも言わない額に刻んだ幾筋かの皺（しわ）で、短く一分刈かと見える頭（つぶり）は、坊さんのようで、福々しく耳の押立（おった）って大（おおき）いのに、引締った口が窪んで、大きく見えるまで、げっそりと頬の肉が落ちている。

（夫人（おくさん）。）

と先生はうつむいたままで、

（再び、御機嫌のお顔を拝することを得まして、私（わたくし）一代の本懐です。生れつきの口不調法が、かく眼前（まのあたり）に、貴方のお姿に対しましては、何も申上げる言（ことば）を覚え

ません、ただしかし、唯今。）

と、よろめいて立って、椅子の手に縋りました。

（唯今、一言御挨拶を申上げます。）

と天幕に入ると、提げて出た、卓子を引抱えたようなものではない、千仭の重さに堪えない体に、大革鞄を持った胸が、吐呼吸を浪に吐く。

　それと見ると、簑を絞って棄てました、お道さんが手を添えながら、顔を見ながら、搦んで、縺れて、うっかりしたように手伝う姿は、かえって、あの、紫の片袖に魂が入って、革鞄を抜けたように見えました。

　ずしりと、卓子の上に置くと、……先生は一足退っ

て、起立の形（なり）で、

（もはや、お二方に対しましては、……御夫婦に向いましては、立って身を支えるにも堪えません、一刻も早くこの人畜（にんちく）の行為（おこない）に対する、御制裁を待ちます。即時に御処分のほどを願います。）

若旦那が、

（よろしいか。）

とちと甘いほどな、この場合優しい声で、御夫人に言いました。

（はい。）

と、若奥様は潔い。

若旦那はまっすぐに立直って、

（立野さん。）

（…………）

（では、御要求をいたします。）

（謹んで承ります、一点といえども相背きはいたしますまい。）

（そこに、卓子の上に横にお置きなさいました、革鞄を、縦にまっすぐにお直し下さい。）

（承知いたしました――いやいや罪人の手伝をしては、お道さん、汚れるぞ。）

と手伝を払って、しっかとその処へ据直す。

（立野さん。貴下は革鞄の全形と折重って、その容量を外れない範囲内にお立ち下さい。縫子が私の妻として、婚礼の日の途中、汽車の中で。）

と云う声が少し震えました。

（貴下に、その紫の袖を許しました、その責に任ずるために、ここに短銃を所持しております、――その短銃をもってここに居て革鞄を打ちます。弾丸をもって錠前を射切るのです。錠前を射切って、その片袖を――同棲三年間――まだ純真なる処女の身にして、私のために取返すんです。袖が返るとともに、更めて結婚します。夫婦になります。が、勿論しかし、それが

夫婦のものの、身の終結になるかも分りません。なぜと云うに、革鞄と同時に、兇器をもって貴下のお身体(からだ)に向うのです。万一お生命(いのち)を縮めるとなれば、私はその罪を負わねばならないのですから。それは勿論覚悟の前です……お察し下さい、これはほとんど私が生命を忘れ、世間を忘れ、甚しきは一人(にん)の親をも忘れるまで、寝食を廃しまして、熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴方が、当時汽車の窓から赤城山の絶頂に向って御投棄てになったという、革鞄の鍵を、何(なん)とぞして、拾い戻して、その鍵を持ちながらお目にかかって、貴下の手から錠を解いて、縫のその袖を返

して頂きたいと存じ、およそ半年、百日に亘(わた)りまして、狂と言われ、痴と言われ、愚と言われ、嫉妬(しっと)と言われ、じんすけと嘲(あざ)けられつつも、多勢(たぜい)の人数を狩集(かりあつ)めて、あの辺の汽車の沿道一帯を、粟(あわ)、蕎麦(そば)、稲を買求めて、草に刈り、芥(あくた)にむしり、甚しきは古塚の横穴を発(あば)いてまで、捜させました。流星のごとく天際に消えたのでしょう、一点似た釘も見当りません。——唯今……要求しますのは、その後(のち)の決心である事を諒(りょう)として下さいまし。縫もよくこの意を体して、三年の間、昼夜を分かず、的を射る修錬をいたしました。——最初、的をつくります時、縫がものさしを取って、革鞄の寸

法を的に切りましたが、ここで実物を拝見しますと、その大(おおき)さと言い、錠前のある位置と言い、ほとんど寸分の違いもありません。……不思議です。……特に奇蹟と存じますのは、――家の地続きを劃(しき)って、的場を建てましたのですが、土地の様子、景色、一本の松の形、地蔵のあるまで。)

――私(わっし)はすくんだね――

(夢のようによく似ています。……多分、皆お互に、こうした運命だと存じます。……短銃(ピストル)は特に外国に註文して、英国製の最優良なのを取寄せました。連発ですが、弾丸はただ一つしか籠(こ)めてありません、きっと

仕損じますまい。しかし、御覚悟を下さいまし。——もっとも革鞄と重（かさな）ってお立ち下さいますのに、その間隔は、五間（けん）、十間、あるいは百間、三百間、貴下（あなた）の、お心に任せます。要はただ、着弾距離をお離れになりません事です。）

（一歩もここを動きません。）

先生は、拱（こまぬ）いた腕を解いて言いましたぜ。」

——そうだろうと、私たちも思ったのである。

十

「堪らねえやね。お前さん。

私あ猿坊のように、ちょろりと影を畝って這出して、そこに震えて立っている、お道姉さんの手に合鍵を押つけた。早く早く、と口じゃあ言わねえが、袖を突いた。

――若奥様の手が、もう懐中に入った時でございますよ。

（御免遊ばせ。）

と縋りつくように、伸上って、お道さんが鍵を合せ合せするのが、あせるから、ツルツルと二三度辷りました。

（ああ、ちょっと。）

と若奥様が、手で圧(おさ)えて、

（どうぞ……そればかりは。）

と清(すず)しく言います。この手二つが触ったものを、錠前の奴、がんとして、雪になっても消えなんだ。

舌の硬(こわ)ばったような先生が、

（飛んでもない事――お道さん。）

（いいえ、構いません。）

と若旦那はきっぱりと、

（飛んでもない事ではありません。それが当然なのです。立野さん。貴下(あなた)が御自分でなくっても、貴下が許

して、錠前をさえお開き下さるなら――方法は択(えら)びません。短銃(ピストル)なんぞ何になりましょう、私はそれで満足します。）

（旦那様。）

と精一杯で、お道さんが、押留められた一つの手を、それなり先生の袖に縋って、無量の思(おもい)の目を凝らした。

（はあ、）

と落込むような大息して、先生の胸が崩れようとしますとな。

（貴方、……あの鍵が返りましたか。……優しい、お道さん、美しい、姉(ねえ)さん、……お優しい、お美しい姉

さんに、貴方はもうお心が移りましたか。）

と云って、若奥様が熟と視ました。

先生が蒼くなって、両手でお道さんを押除けながら、

（これは余所の娘です、あわれな孤児です。）

とあとが消えた。

（決行なさい、縫子。）

（…………）

（打て、お打ちなさい。）

（唯今。）

と肩を軽く斜めに落すと、コオトが、すっと脱げたんです。煽りもせぬのに気が立って、颯と火の上る

松明（たいまつ）より、紅（くれない）に燃立つばかり、緋（ひ）の紋縮緬（もんちりめん）の長襦袢（ながじゅばん）が半身に流れました。……袖を切ったと言う三年前（ぜん）の婚礼の日の曠衣裳（はれいしょう）を、そのままで、一方紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革鞄に留まった友を慕って、火先にひらひらと揺れました。

若奥様が片膝ついて、その燃ゆる火の袖に、キラリと光る短銃（ピストル）を構えると、先生は、両方の膝に手を垂れて、目を瞑（つむ）って立ちました。

（お身代りに私が。）

とお道さんが、その前に立塞（たちふさ）がった。

「あ、危い、あなた。」

と若旦那が声を絞った。

若奥様は折敷いたままで、

（不可(いけ)ません——お道さん。）

（いいえ、本望でございます。）

（私が肯(き)きません。）

と若奥様が頭(かぶり)を掉(ふ)ります。

（貴方が、お肯き遊ばさねば、旦那様にお願い申上げます。こんな山家の女でも、心にかわりはござんせん、願(ねがい)を叶(かな)えて下さいまし。お情(なさけ)はうけませんでも、色も恋も存じております。もみじを御覧なさいまし、つれない霜にも血を染めます。私はただ活(い)きております

より、旦那さんのかわりに死にたいのです。その方が嬉しいのです。こんな事があろうと思って、もう家を出ます時、なくなった母親の記念（かたみ）の裾模様を着て参りました。……手織木綿に前垂（まえだれ）した、それならば身分相応ですから、人様の前に出られます。時おくれの古い紋着（もんつき）、襦袢も帯もうつりません、あられもないなりをして、恋の仇（かたき）の奥様と、並んでここへ参りました。ふびんと思って下さいまし。ああ女は浅間しい、私にはただ一枚、母親の記念（かたみ）だけれど、奥様のお姿と、こんなはかないなりをくらべて、思う方の前に出るのは死ぬよりも辛うござんす。それさえ思い切りました。男

のために死ぬのです。冥加（みょうが）に余って勿体ない。……ただ心がかりなは、私と同じ孤児（みなしご）の、時ちゃん―少年の配達夫―の事ですが、あの児（こ）も先生おもいですから、こうと聞いたら喜びましょう。）

　若旦那の目にも、奥様にも、輝く涙が見えました。

　先生は胸に大波を打たせながら、半ば串戯（じょうだん）にするように、手を取って、泣笑（なきわらい）をして、

（これ、馬鹿な、馬鹿な、ふふふ、馬鹿を事を。）

（ええ、馬鹿な女でなくっては、こんなに旦那様の事を思いはしません。私は、馬鹿が嬉しゅうございます。）

（弱った。これ、詰(つま)らん、そんな。）

（お手間が取れます。）

（さあ、お退(ど)き、これ、そっちへ。）

（いいえ、いいえ。）

否々(いやいや)をして、頭(かぶり)をふって甘える肩を、先生が抱いて退(の)けようとするなり、くるりとうしろ向きになって、前髪をひしと胸に当てました。

呼吸(いき)を鎮(しず)めて、抱(いだ)いた腕を、ぐいと背中へ捲(ま)きましたが、

（お退(ど)きと云うに。——やあ、お道さんの御(おん)母君、御(ご)母堂、お記念(かたみ)の肉身と、衣類に対して失礼します、御

許し下さい……御免。）

と云うと、抱倒して、

（ああれ。）

と震えてもがくのを、しかと片足に蹈据(ふみす)えて、

仁王立(におうだち)にすっくと立った。

（用意は宜(よろ)しい。……縫子さん。）

（…………）

（…………）

（さようなら……）

（……さようなら、貴方。）

日光の御廟(おたまや)の天井に、墨絵の竜があって鳴きます、

尾の方へ離れると音はしねえ、頤（あご）の下の低い処で手を叩くと、コリンと、高い天井で鳴りますので、案内者は、勝手に泣竜と云うのでございますが、同じ音で。

——

コリンと響いたと思うと、先生の身体（からだ）は左右へふらふらして動いたが、不思議な事には倒れません。

南無三宝（なむさんぼう）。

片手づきに、白襟の衣紋（えもん）を外らして仰向（あおむ）きになんなすった、若奥様の水晶のような咽喉（のど）へ、口からたらたらと血が流れて、元結（もっとい）が、ぷつりと切れた。

トタンにな、革鞄の袖が、するすると抜けて落ちま

した。

（貴方……短銃を離しても、もう可うございますか。）

若旦那が跪いてその手を吸うと、釣鐘を落したように、軽そうな手を柔かに、先生の膝に投げて、

（ああ、嬉しい。……立野さん、お道さん、短銃をそちらへ向けて打つような女とお思いなさいましたか。）

（只今、立処に自殺します。）

と先生の、手をついて言うのをきいて、かぶりを掉って、櫛笄も、落ちないで、乱れかかる髪をそのまま莞爾して、

（いいえ、百万年の後に……また、お目にかかります。

お二方に、これだけに思われて、縫は世界中のしあわせです——貴方、お詫は、あの世から……）

最後の言葉でございました。」

「お道さんが銀杏返の針を抜いて、あの、片袖を、死骸の袖に縫つけました。

その間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お縫さんの、柔かに投げた腕を撫で、撫で、

（この、清い、雪のような手を見て下さい。私の偏執と自我と自尊と嫉妬のために、詮ずるに烈しい恋のために、——三年の間、夜に、日に、短銃を持たせられ

た、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にするような拷掠（ごうりゃく）に、よくもこの手が、鉄にも鉛にもなりませんでした。ああ、全く魔のごとき残虐にも、美しいものは滅びません。私は慚愧（ざんき）します。しかし、貴下（あなた）と縫子とで、どんなにもお話合のつきますように、私に三日先立って、縫子をこちらによこしました、それに、あからさまに名を云って、わざと電報を打ちました。……貴下（あなた）を当電信局員と存じましていたした事です。とにかく私の心も、身の果（はて）も、やがて、お分りになりましょう。）

と、いいいい、地蔵様の前へ、男が二人で密（そっ）と舁（かつ）ぐと、お道さんが、笠を伏せて、その上に帯を解いて、

畳んで枕にさせました。

私（わっし）も十本の指を、額に堅く組んで頂いて拝んだ。

そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべながら……

（失礼、支度をいたしますから。）

若旦那がするすると松の樹の処へ行（ゆ）きます。

そこで内証で涙を払うのかと偲うと、肩に一揺（ひとゆす）り、ゆすぶりをくれるや否や、切立（きったて）の崖の下は、剣（つるぎ）を植えた巌（いわ）の底へ、真逆様（まっさかさま）。霧の海へ、薄ぐろく、影が残って消えません。

――旦那方。

先生を御覧なせえ、いきなりうしろからお道さんの

口へ猿轡（さるぐつわ）を嵌（は）めましたぜ。――一人は放さぬ、一所に死のうと悶（もだ）えたからで。――それをね、天幕（テント）の中へ抱入れて、電信事務の卓子（テエブル）に向けて、椅子にのせて、手は結（ゆわ）えずに、腰も胸も兵児帯でぐるぐる巻だ。

（時夫の来るまで……）

そう言って、石段へずッと行（ゆ）く。

私（わっし）は下口（おりくち）まで追掛（おっか）けたが、どうして可（い）いか、途方にくれてくるくる廻った。

お道さんが、さんばら髪に肩を振って、身悶えすると、消えかかった松明が赫（かッ）と燃えて、あれあれ、女の身の丈に、めらめらと空へ立った。

先生の身体が、影のように帰って来て、いましめを解くと一所に、五体も溶けたようなお道さんを、確と腕に抱きました。

いや何とも……酔った勢いで話しましたが、その人たちの事を思うと、何とも言いようがねえ。

実は、私と云うものは……若奥様には内証だが、その高崎の旦那に、頼まれまして、技師の方が可い、とさえと一言云えば、すぐに合鍵を拵えるように、道中お抱えだったので。……何、鍵までもありゃしません。

——天幕でお道さんが相談をしました時、寸法を見るふりをして、錠は、はずしておいたんでございますの

に――

皆、何とも言いようがねえ、見てござった地蔵様にも手のつけようがなかったに違えねえ。若旦那のお心持も察して上げておくんなせえ。

あくる日岨道（そばみち）を伝いますと、山から取った水樋（みずどよ）が、空を走って、水車（みずぐるま）に颯（さっ）と掛（かか）ります、真紅（まっか）な木の葉が宙を飛んで流れましたっけ、誰の血なんでございましょう。」

（峰の白雪麓（ふもと）の氷
今は互に隔てていれど）

あとで、鋳掛屋に立山を聴いた――追善の心である。皆涙を流した……座は通夜のようであった。

姨捨山の月霜にして、果（はてし）なき谷の、暗き靄（もや）の底に、千曲川は水晶の珠数の乱るるごとく流れたのである。

大正九（一九二〇）年十二月

底本：「泉鏡花集成６」ちくま文庫、筑摩書房
１９９６（平成８）年３月21日第１刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十巻」岩波書店
１９４１（昭和16）年５月20日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、「安達（あだち）ヶ原」「梟（ふくろ）ヶ嶽（たけ）」は小振りに、「焼（やけ）ケ嶽」は大振りにつくっています。
※誤植の確認には底本の親本を参照しました。
入力：門田裕志
校正：高柳典子
２００７年２月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。